

## 特集 不安を超える① 現世祈禱

ぶっしきじょうとうしき  
仏式上棟式

アイオイ保険センター 呉営業所  
でんわ〇八二三(二四)七〇〇七

去る四月九日、アイオイ保険センター呉営業所社屋の上棟式が仏式で行われました。施主は、本片面憲治さん。本片面さんは、仏教壮年会の会長として、毎月の仏教壮年会例会や花まつり等の行事で大活躍されています。赤ちゃんの宮参りは初参式(三・四頁参照)、地鎮祭は仏式の起工式(寺報九〇号で紹介)、仏式の結婚式(八九号で紹介)等、何だつて仏式があるのです。「死んだ後は仏様」で、「この世のことは神さまで」なんて言っている人は真宗を嫌らない証拠。今回は上棟式のご紹介です。

## 「不安」に向き合う

私たちは、先行きの見えない未来に不安を感じ、また、つらい人生に直面した時に、眼に見えない人間の力を超えた存在、例えば神さまを敬い、その力を当て頼りにすることで、少しでも思い

通りになるよう身を処していこうとします。気休めか本気か、実効性(じつこうせい)の期待度は人さまさまですが、人生の節目に行われる色々な儀礼儀式も、一般的には同様の意味合いで行われています。しかし、親鸞さまは、「信心の行者には、天の神、地の神様も敬い平伏し、魔界(まがい)外道(げだう)も障り(さまたけ)障り(さまたけ)となることがない(『歎異抄』第七条取意)」と言われ、天の神、地の神が、信心の行者に対して敬い平伏するのだと全く逆の事をいわれています。先日、壮年会(じゆうねんかい)を皆で読んだ時に、ある会員が「すごい自信だ、私もこうなりたい」と言っておられました。この自信は一体どこからくるのでしょうか。

## 信心とは智慧

信心というと、「一般的には、人間には分からない存在(존在)や力(力)に対して、それを当て頼りにして生きること」と考えるようです。信心をそのように捉える時、この言葉は、「阿弥陀(あみだ)さまを当てる(あて)頼りにすれば、(阿弥陀(あみだ)さまの方が神さまよりエライから)、阿弥陀(あみだ)さまの力をたのみにしている者(もの)に対しては、神々は害(がい)悪(あく)を及ぼす(およぼ)ことはない」という意味になります。しかしそれは、分

からないものを当てにしている限り、どこまでも「多分(たぶん)そうだろう」という推測(すさめ)の域(まは)を出ることはできません。つまり、目の前の不安(あやしみ)に対して、多分大丈夫(たぶんだいじょうぶ)だろうというような向き合い方(かた)では、本当の意味(まこと)での不安(あやしみ)の解決(かいげつ)、親鸞(しんねん)さまのよう(よう)な自信(じゆんしん)にはなりません。

親鸞(しんねん)さまは、「信心(しんしん)」について説明(せつめい)されて、「智慧(ちゑ)の信心(しんしん)」といい、「信ずる心(しん)の出で(い)くるは智慧(ちゑ)のおこる(おこ)ると知るべし(し)(原文(げんぶん)片(ぺ)仮名(か)名(な)と示(し)されて、信心(しんしん)とは智慧(ちゑ)であると(と)おっしゃ(おっしゃ)います。仏教(ぶつこう)の根幹(こんかん)は「正(ただ)しく物(もの)を見る(み)ること」です。それを「智慧(ちゑ)」といい「さとり」ともいいます。つまり、信心(しんしん)の智慧(ちゑ)を獲(え)て、私(わが)と私(わが)の人生(じんせい)を正(ただ)しく見(み)ることができ(き)るようになると、神(かみ)さまに敬伏(けいふく)する必要(ひつよう)のない、もうひとつの生き方(かた)が開(ひら)かれるという(いう)ことを示(し)されているのです。分からない何か(なに)かを当て(あて)にする事(こと)でもなく、単(ただ)なる気休(きしよ)めも必要(ひつよう)ない、もっと確(たし)かな人生(じんせい)を示(し)されているのです。起工式(きこうしき)・上棟式(じょうとうしき)に關(か)しては、するの(の)はいたつて簡単(かんぱん)。建設(けんせつ)会社(かいしゃ)に「仏式(ぶつしき)で(で)します」と連絡(れんらく)を入れて、後(あと)はお寺(てら)にご連絡(れんらく)下さい。法要(ほふよう)時間(じかん)は三〇分(さんじゅうぶん)弱(じやく)。お仏飯(ぶつめし)とお花(はな)を、準備(じゆんび)くだされば、後(あと)はお寺(てら)で準備(じゆんび)します。